

續群書類從

五百五十三

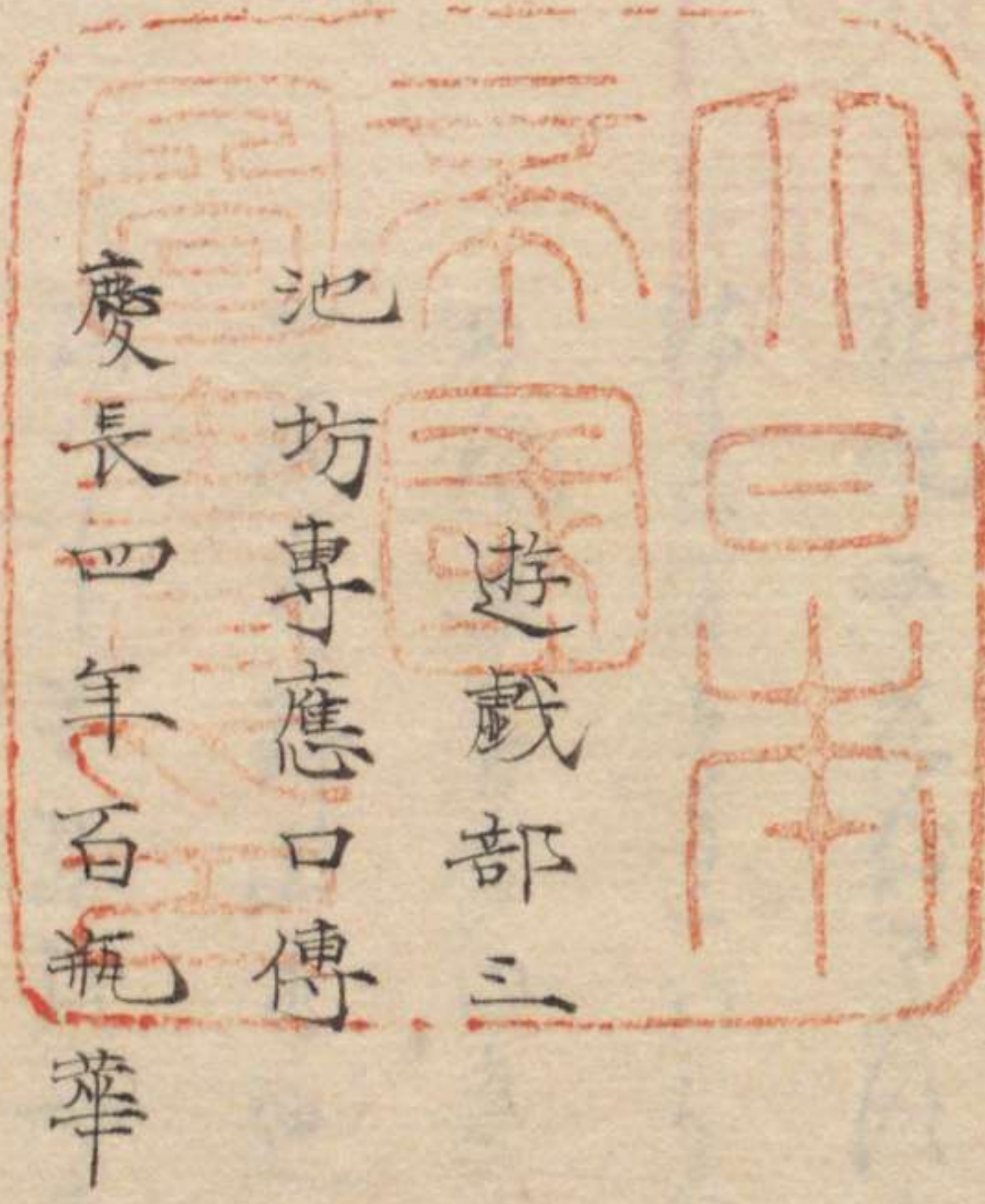
和書門				
二八七冊	一〇架	二一八函	二四五六號	類

庫文閣内				和書
二八函	二一八冊	二四五六號	二八七冊	類

内閣文庫			
番號	和	28457	
冊數	1185	(650)	
函號	216	1	



續群書類從卷第五百五十三



總檢校保己一集
男源忠室校



池坊専應口傳

花瓶に花枝を挿しし事いふに「ふと阿弥とはき
ゆきとそきいり」き花枝のそきにてそき
の風奥をいひきき「そき」ある計ありこの
一流を野山あはれそのほろりある姿を辰より阿
らり「そき」花枝のそき「花面」けをそき
先祖と「花」「そき」一「そき」あまうて都都
のりてあまうとある人竹庵の徒然を忘
きやうとそき「破亮」古枝を指立てそき
ひて「そき」花もつハ廬山江湖の風景いふ

ハのそとわくく腹樹臨池の絶境もくくふふきて
える事稀之王摩流、洞川の園も夏涼もを
生するふあつた舞休舞のそふの袖も秋も我
棄するとあつた庭あふ山まつき垣の内も泉我
引も人か我もつらつたてを所事我をたてふ
水天樹をもつて江山都程の清静我もくく皆
時頃刻の百ふ千変万化の位興我もくく我を宛仙
家の妙洞ともいつくを十層のまうふ七層
よハ葛籠をきて三層ふ我居ても足あふぬ席の
たのくハ海ふ安養界の宝樹室池も夏我を海



事をくくくく事我世界ふ明風も籠の上ふそ
にふひく海凡佛も初我の事歳くく一実の法我ふ
いふ海もくく我我もくく源とせもくく我我ふ思の
道ふ根立我ふくくくくくくくく調度するも盛
者必我のそハ我我もくくくくくくくくくくく
松や杉系のをめくくくくくくくくくくくくく
世々の松系我もくくくくくくくくくくくくく
為涅槃妙心の法門もくくくくくくくくくくく
棄ふ所爲もくくくくくくくくくくくくくくく
山居ハ木摩我もくくくくくくくくくくくくく

竹をさく——竹を伐もて阿我ぬ人等木伐見て心
をのへる竹のあひき伐れもひ一旦の奥を伐り
すのこけり花を葉のうき花前ふりぬき
乃種をうぬるもや休らん いささ母は序上

一 三貝豆の葉は真なるや凡玉瓶一ふけすこ
ともありてみりてゐるを二長そふてり
ぬきすつきぬは枝葉のうき前種後きた花
種とんきふて葉の枝とてさう小割を用ゐ
者の葉もと居て法を用つ——長種の枝葉も四
方けり——さうてりるも又四角伐ぬるやう

一 木ありて副高隠みり——流の枝前並枝用の枝
葉を削りて園花のさくもてとて枝葉のこきり
うきさく——さうてりるも又四角伐ぬるやう
にれり——水きききりるも又四角伐ぬるやう
にれり——

一 根玉瓶射する所のさく木と木とを葉と葉とを
又葉とを葉とをさく竹とともつてり——
一 五葉の葉を副のさくひきふては。ぬき——
一 障きさくハ向ひて、射す——
一 中葉の副ハさくふとさくハハれぬて法はぬき

一 柳の木のふちをたゞしは横にえりてたけを
さへくさるるあり

一 柳の根の細板よりあらう枝を伐ちてそのあらう
うへに

一 一輪の内よりとりまづきき伐ちてと用紙より
きふとぬきぬき、ち二あつて一ち一このうへ
をきこくとぬきふんぬきぬき

一 中央の花ハ何れもおとてある

一 書院のきりつめのきハ裏面きとぬきぬき

一 一輪のうちより一ち一あつてぬきぬき枝をぬき

らハきつては幾くその方伐ち枝をぬきぬき

おれ用つきあり一ちの枝ハぬきぬき

抱一方きたつていぬ一ちいぬき一ち一はぬ

つふきつちハ一ち一ち一ちハぬきぬき

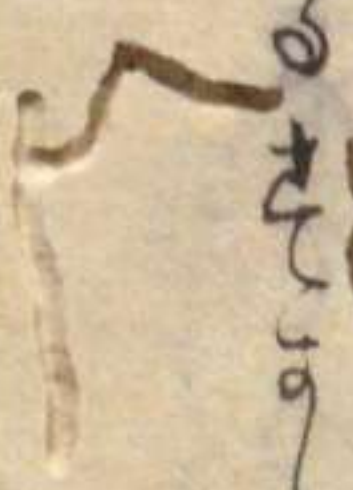
うへにさのあらうに枝きぬきぬき

うへにさのあらうに枝きぬきぬき

おれ一好きをはきぬきぬき

一 水きぬきぬきぬきぬき

あつぬきぬきにぬきぬきぬき



一壁より見えしとて後我は是を

一本切

一後より一より枝「や好」前切の事

一瓶の口よりさる枝葉の事以十二の条を專と

一と定つて一は十二の條條也「以下好下」

一は枝のうちよりさるゝとく一は

一花の葉の多し時似る事此の事常なり

一一枝よりひく花面一編なり用つて

花のうちよりあるは枝より用つて又二ある

二つ用つて

口条好ナシ

一枝の口より下は用つてあるは二寸布と枝

きて用つて

一この瓶の時花瓶ふつもの花のより枝より用

是よりさるは枝より用つて一は花のより枝より

用つてさるは枝より用つて一は花のより枝より

用つてさるは枝より用つて一は花のより枝より

とも替へ用つて

一法陽の事とて面をんる事何とて又裏面は

表面用つて

一花枝神前の花は枝葉の葉よりある事此の

五言句小用し草木

元三 梅 水仙花 金錢華

山己 桃 柳 款冬

端午 竹 菖蒲 石竹

七夕 桔梗 仙荊花 梔木

重陽 菊 萩 鶏頭花

言くたそはあめ事

金錢花 岸氏馬皇子好 鷹足 葱 せんし

法已 石葦花とつるふ 薔薇れき 少きのた

太山橘 富士松子 澤桔梗 つち草

一 梅 岩躑躅 香附子 蔥花きんろ

一 曼珠沙華 河骨 竜膽 赤茶

一 深古しや 白丁花 沉丁花 野菊きく

。鬼阿きみ

。凡このきくひあ

一 松竹梅乃花とて押板の工に瓶のふしけ三種用

事役候多し一之瓶とにもに松を用事ふく又

二瓶を松とて一之瓶を尚季の花とて用事あり

一 竹と梅ふしき

一 砂の物地をのりふ割のりふしき又香蓋付

7
 8
 13
 14

一門の爲に銭嫌ひを誰に忌む

一軍陣より花子端むきぬるゝのきふ北の破

多々
 木枝
 うき
 多々
 木枝
 婦人
 之
 城内
 中
 有
 椿
 花
 句

孫軍市銭

一水争尔石山步线云し海苔ひといふんぞ浅籠

にそは花の邊とやせとも蓮ふききそ樹の影

立客

一對子花瓶
志為善書亦
為心坎

一男、女、赤、白、と、男、女、は、赤、白、と、女、女、は、白、赤、と、用、了、

一、包抱花线用渴水方小以之花线用有

一掃空をハ殺後不用心死花をば嬌ふ可り

一風情與海志相
下筆如風雨
一盡有海志

よは下字なみく

一口のひききある花瓶をはりて
 くらゐ世中を眺

花瓶は中程より細く水は

一、は糸子好上ノ如シ後ノ時上座ノ花一瓶
予心を可くし藥ノ花い

つぎに、
くさくさ
と、
瓶に
乃、
時、
中、
学、
を、
市、
と、
す

臣

いふ事好ナシ

一春の末より夏秋の末よりハ一瓶の内草花

うちふりし秋の末より冬去りし

よしてハ樹のち日中

専祝儀ふりし事

松竹梅椿柳海棠石竹鶏頭花

岩躑躅金蔥花桔梗菊桃柘榴仙鶴花好

岸山好常黒牡丹金盞花山橘白棋

鴈鼻芙蓉長春水仙花仙萼菓百合

著莢杜若常磐木い等菊つき

從儀の娘多木

雜木 雜草 四花 四葉 四草 四木 六花

六葉 茄子花 殘花 萱草 槐花 荷花

紫竹 紫莢 河骨 了酢木 橘 山外木

蔓柳 米柳 蘇花木 瓜 茶木 松 檉花

竜膽 木槿華 白葱好 丁香 切附草 蔓殊花

芭蕉 薔薇 昆尾草

木の枯多る相承破多る相用し

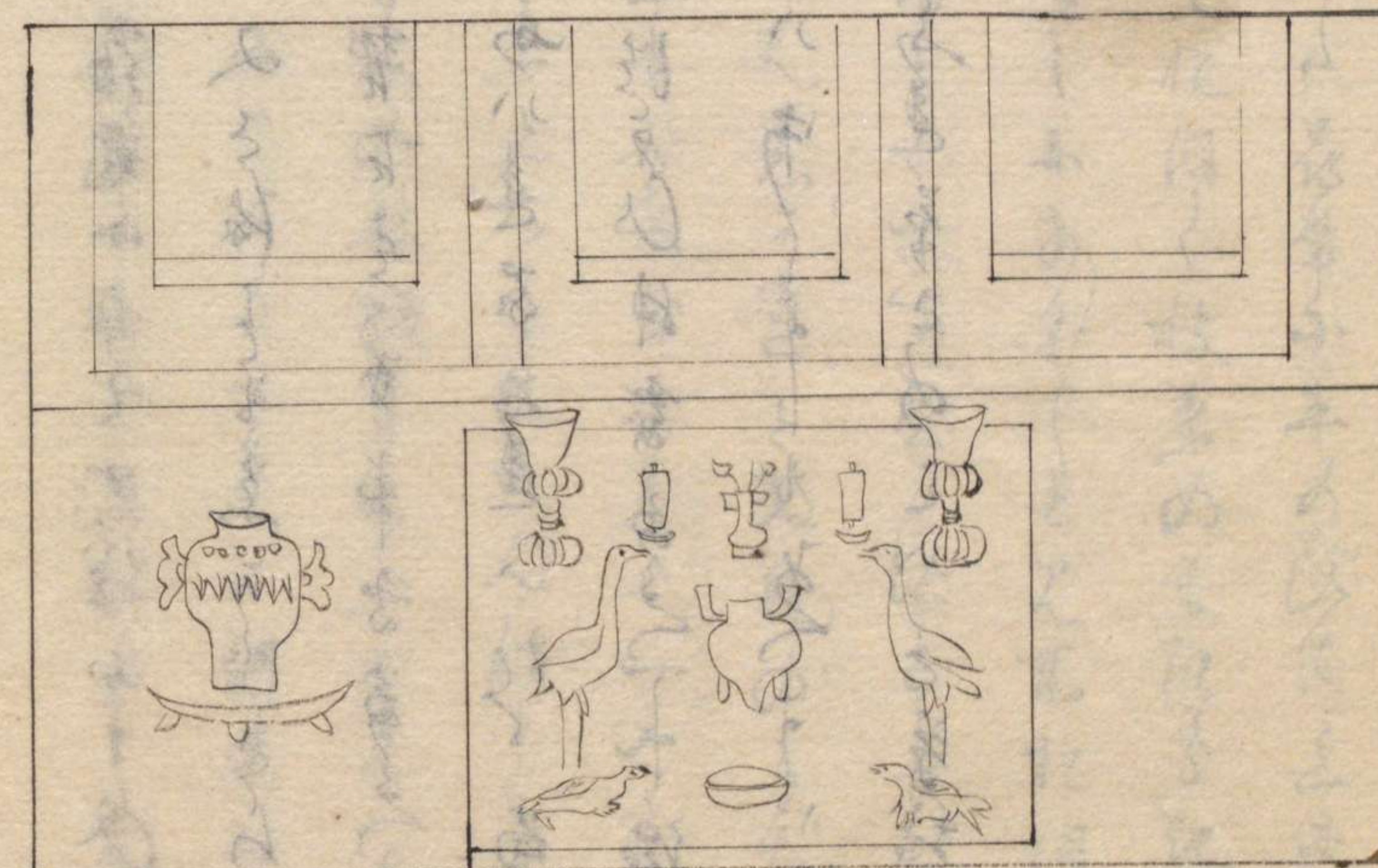
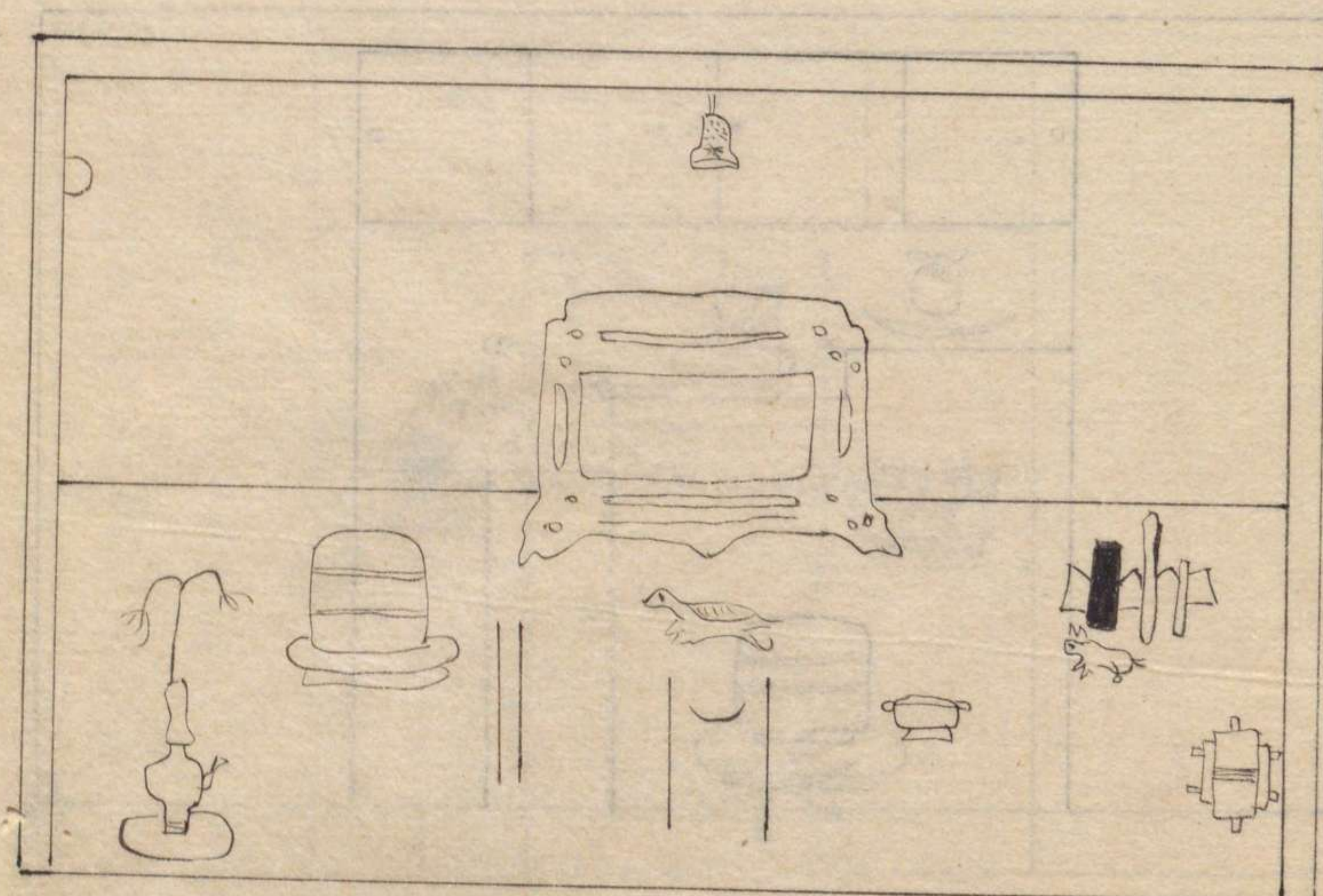
凡諸通とも不純なありしを道法仕り事

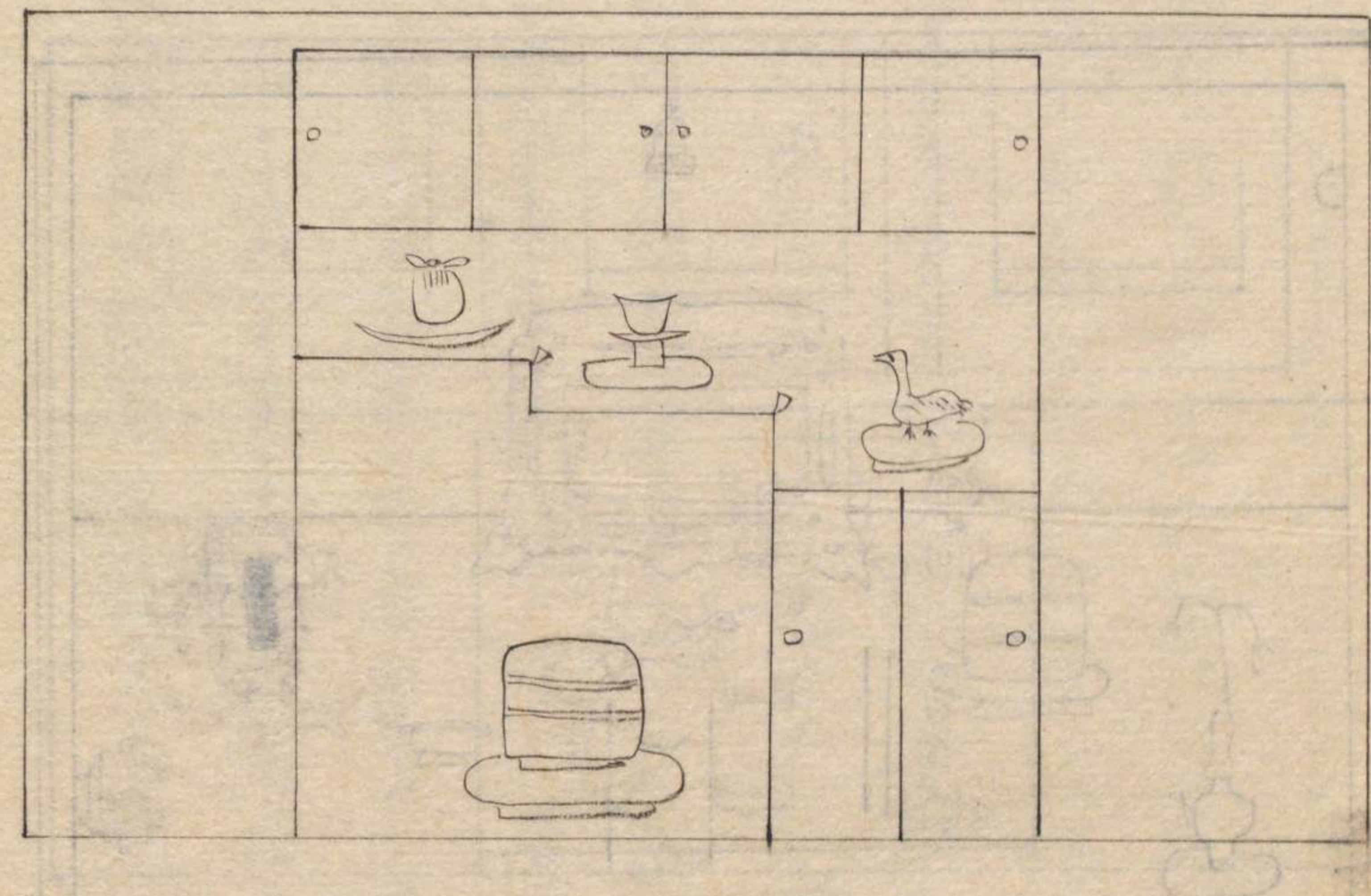
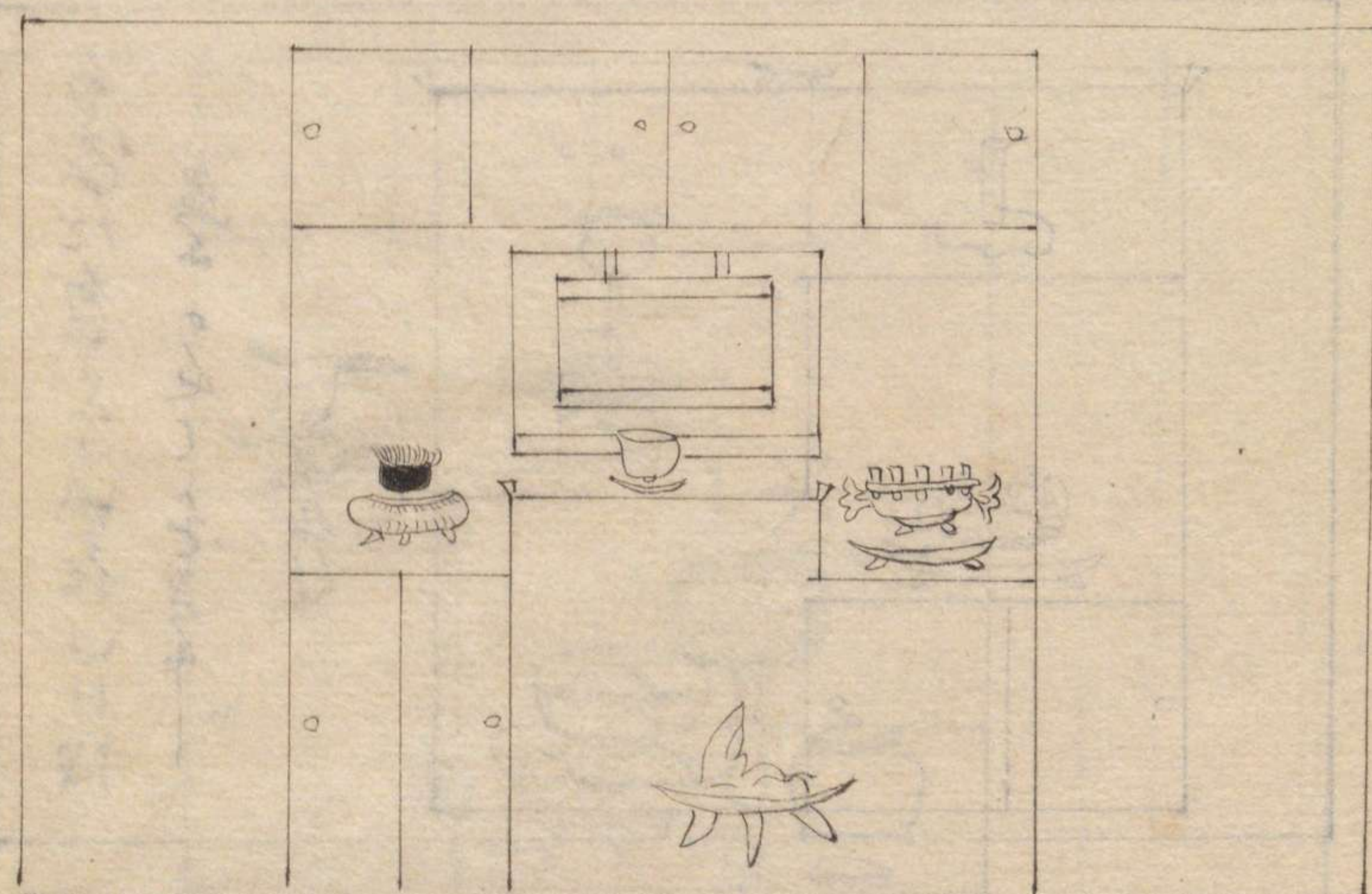
侍るしをたし急用ありしを暫古めると

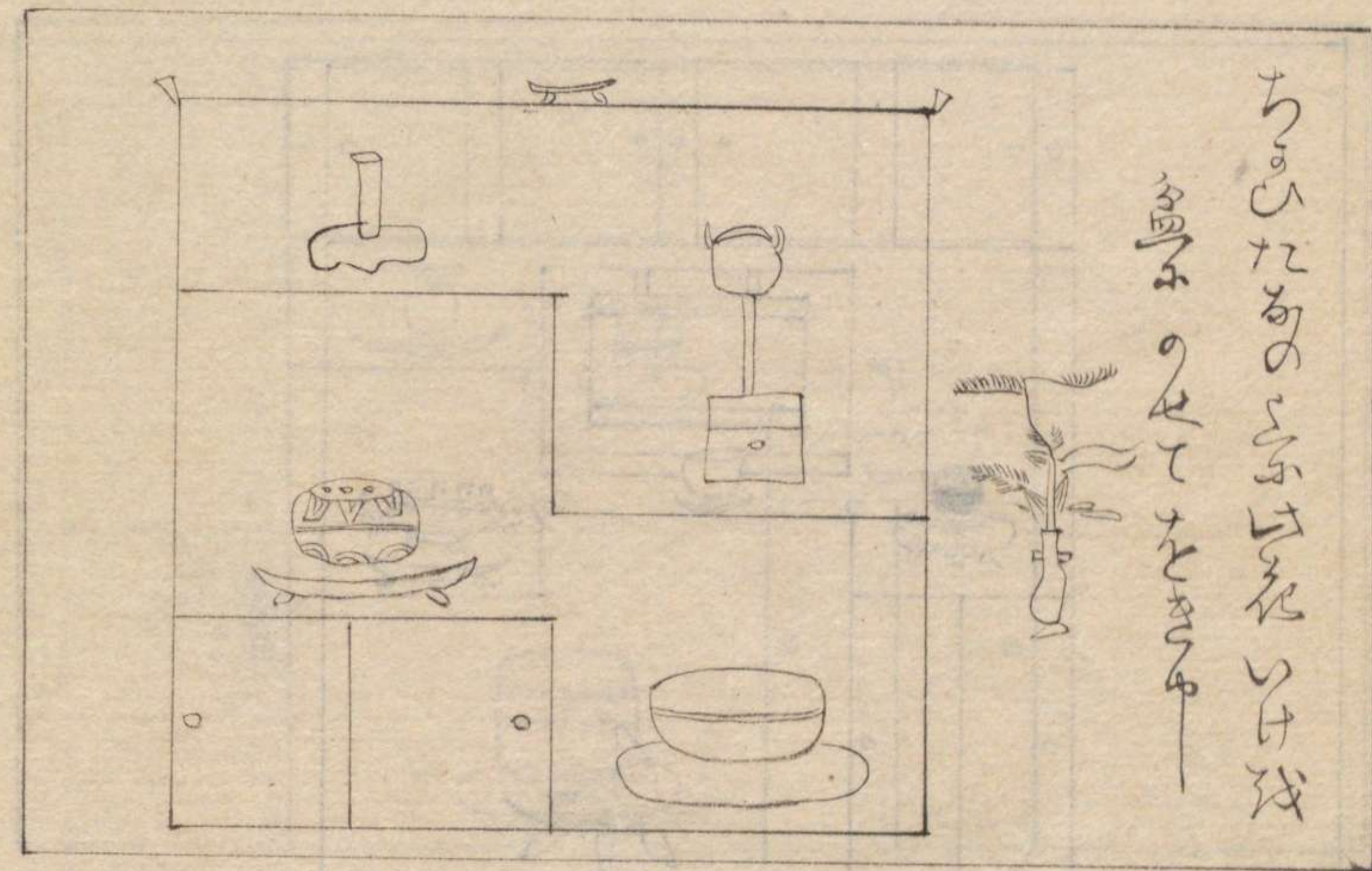
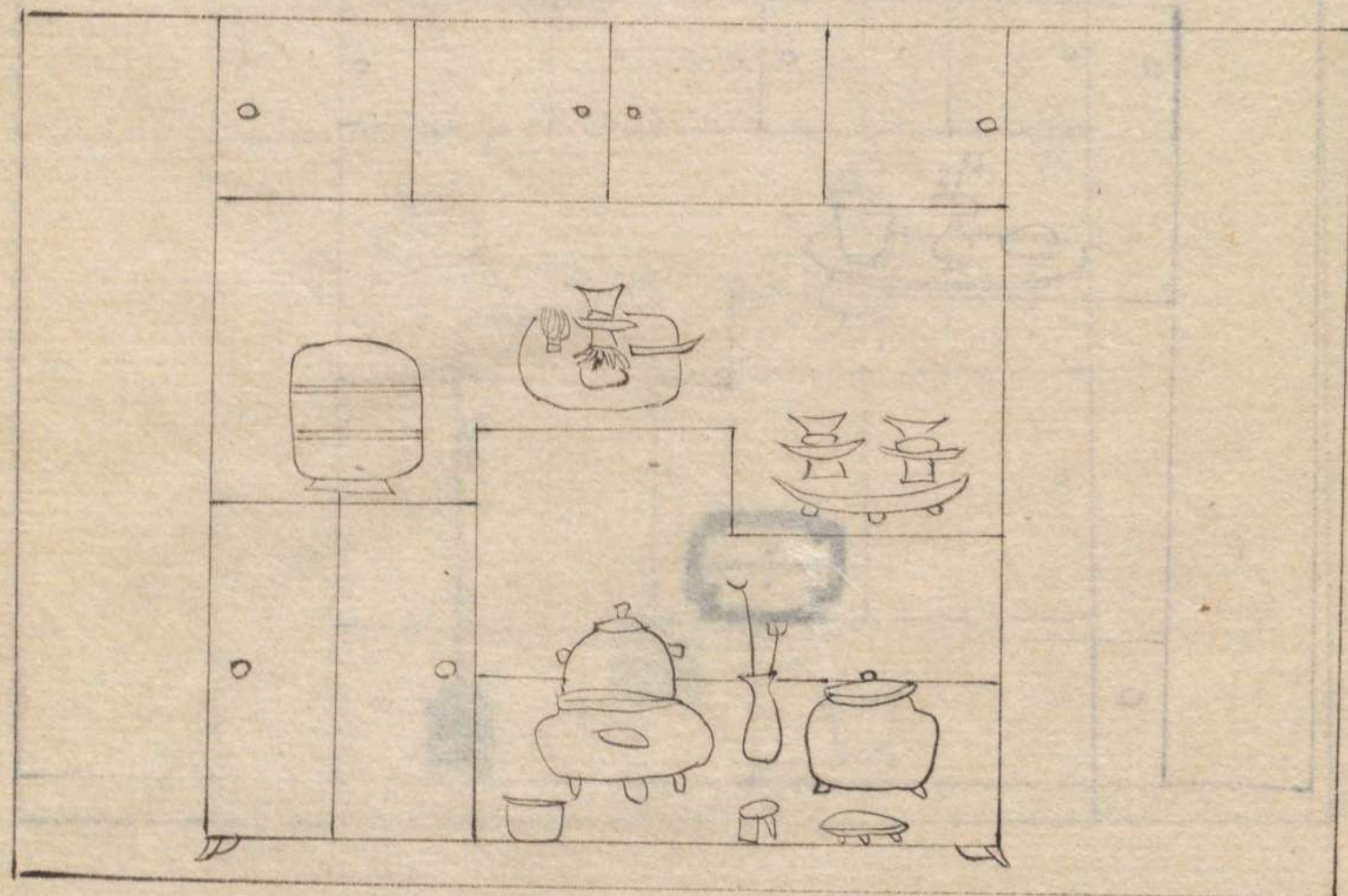
ありけり其ありしを安代立本とありし一瓶

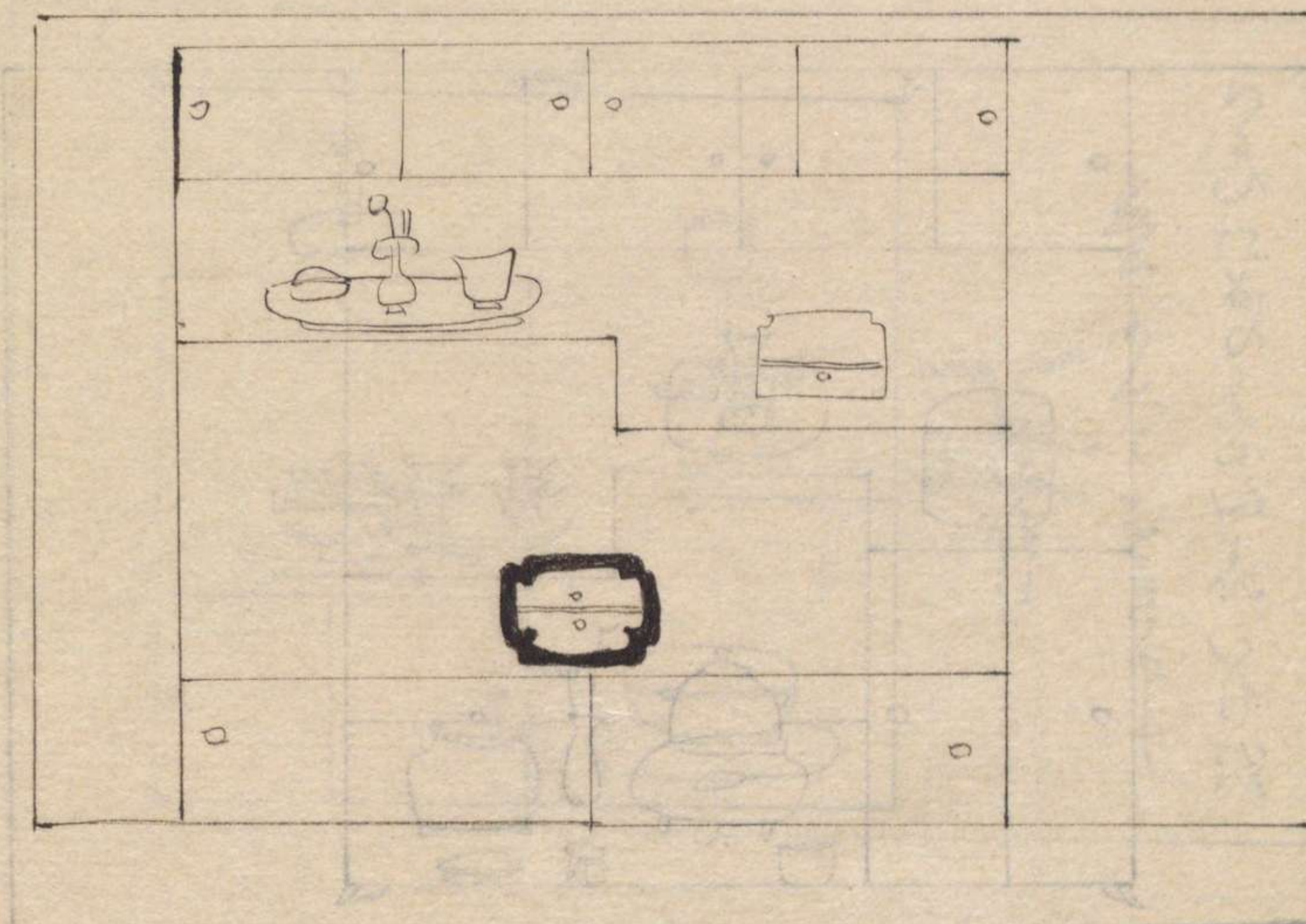
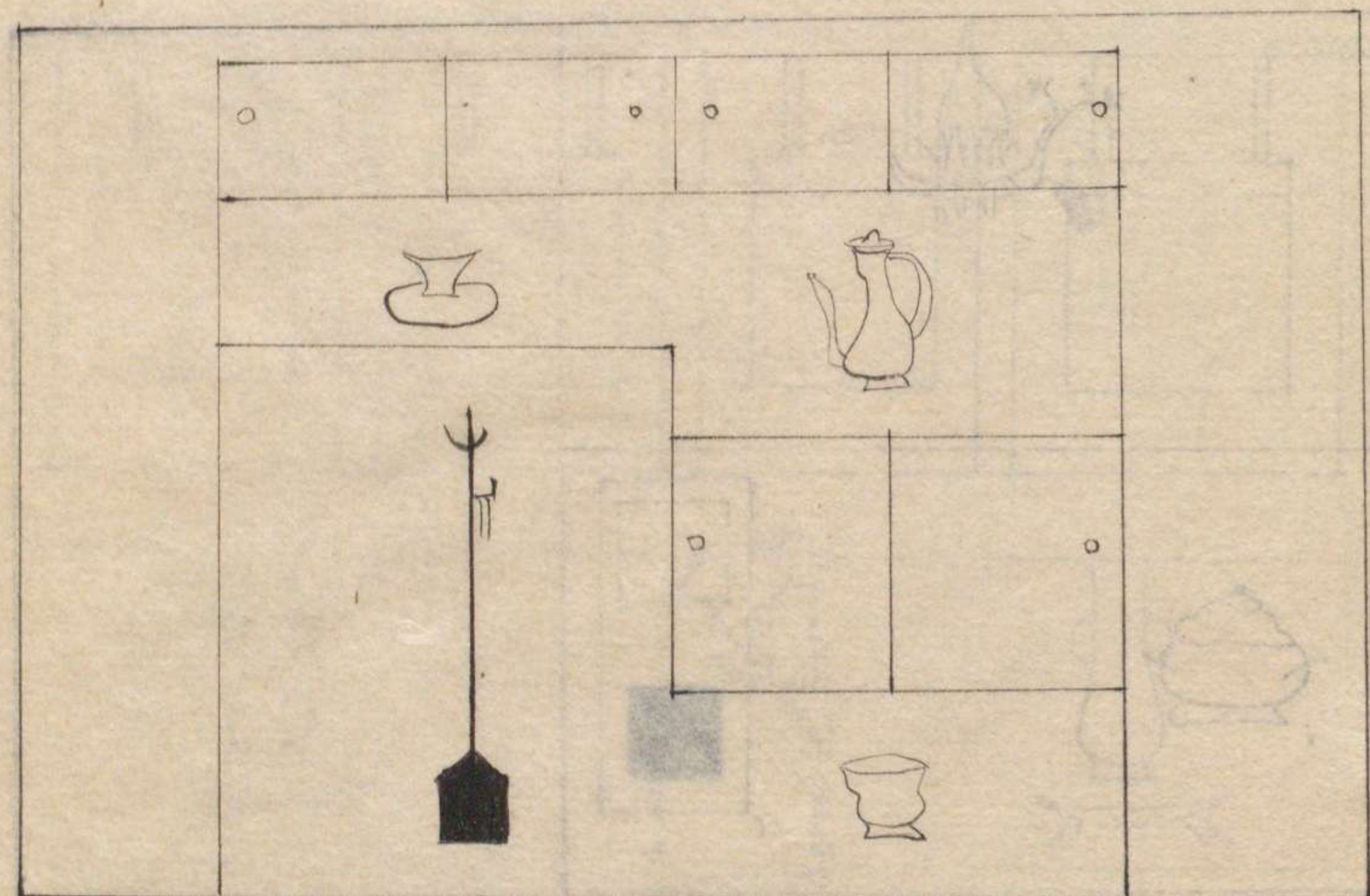
めもさういふ常ふまのしとてふらり中程
ふらり何れ何れ枝葉のまゝに記ふと母の
風一種くまありとて何れ何れとて水
きはあましくするをくにさしある花枝より記ふ
とはやと志のまゝと教範のうらみ様くのみ料或
志行草もさうあるまゝいさうふらりするまゝに
あゝとてとちうのふらり何れ何れとて
けさる母の林枝もさうあるまゝとて
むしきあゝとて何れ何れのみあり
さう何れ何れとて何れ何れとて
さう何れ何れとて何れ何れとて

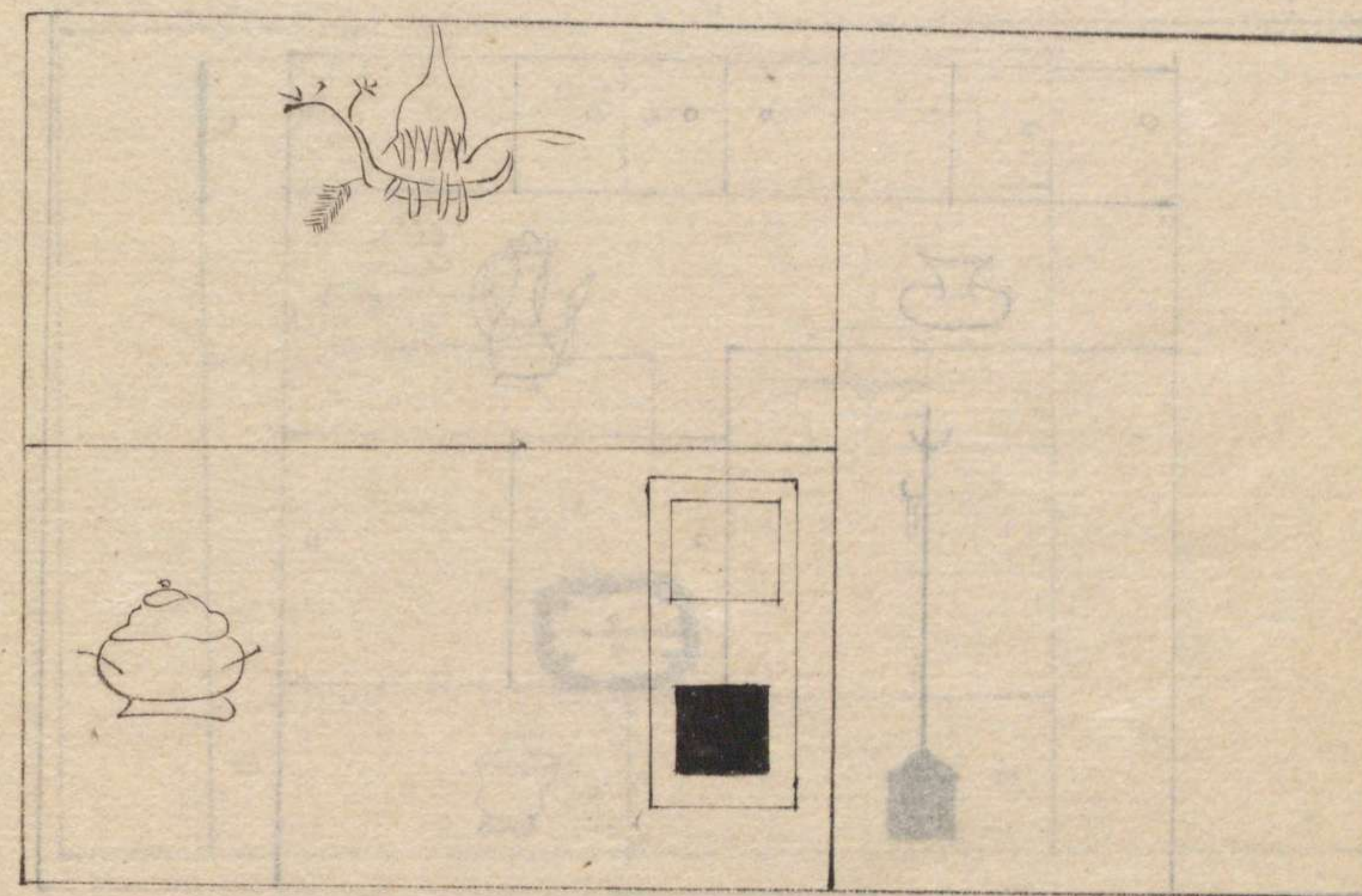
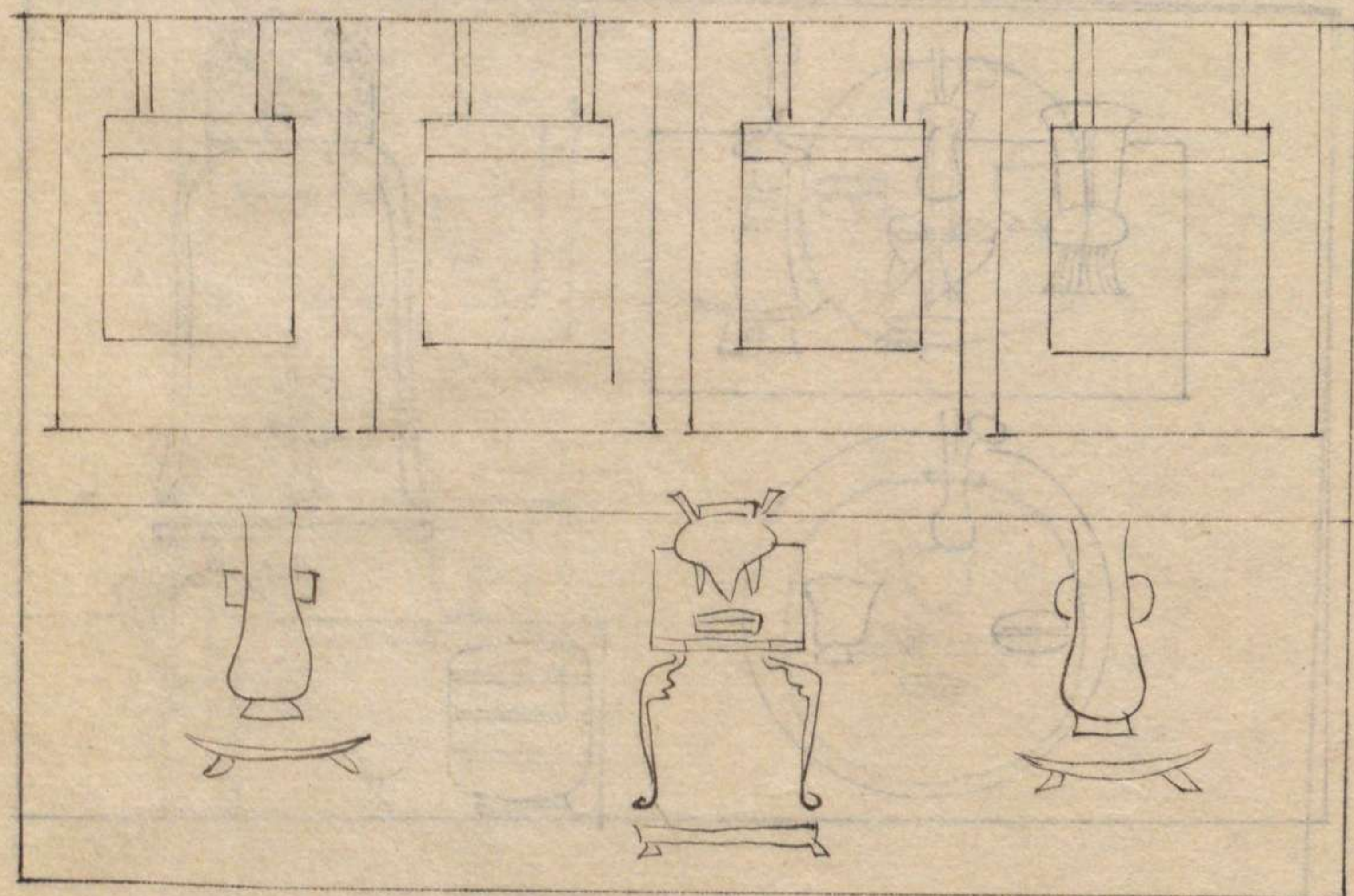
妻哉恋存龜ふらりて妻哉ありひ
なとて又さう何れ何れとて
ふらりて何れ何れとて何れ何れとて
ふらりて何れ何れとて何れ何れとて
ふらりて何れ何れとて何れ何れとて
ふらりて何れ何れとて何れ何れとて
ふらりて何れ何れとて何れ何れとて
ふらりて何れ何れとて何れ何れとて
ふらりて何れ何れとて何れ何れとて
ふらりて何れ何れとて何れ何れとて

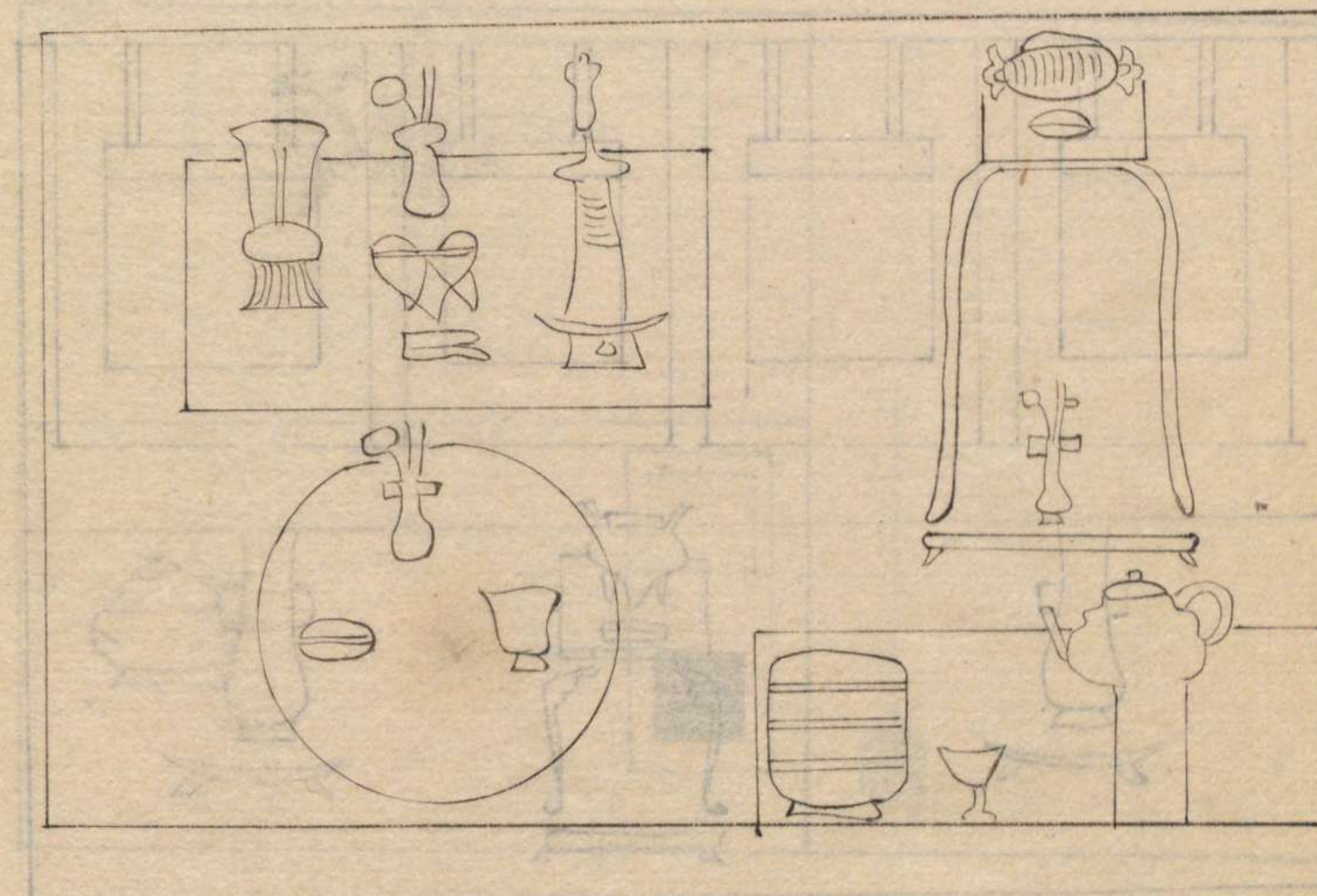
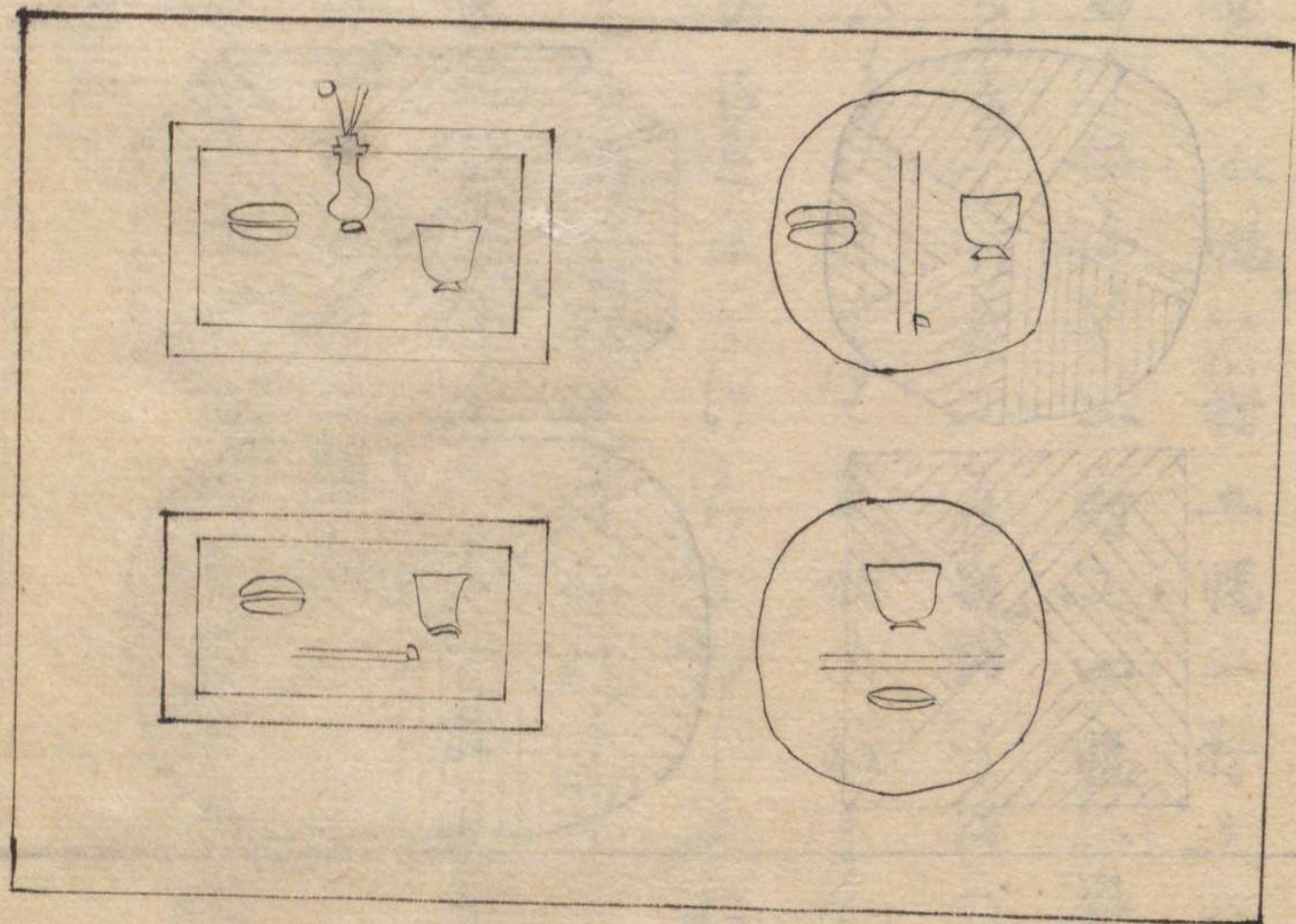


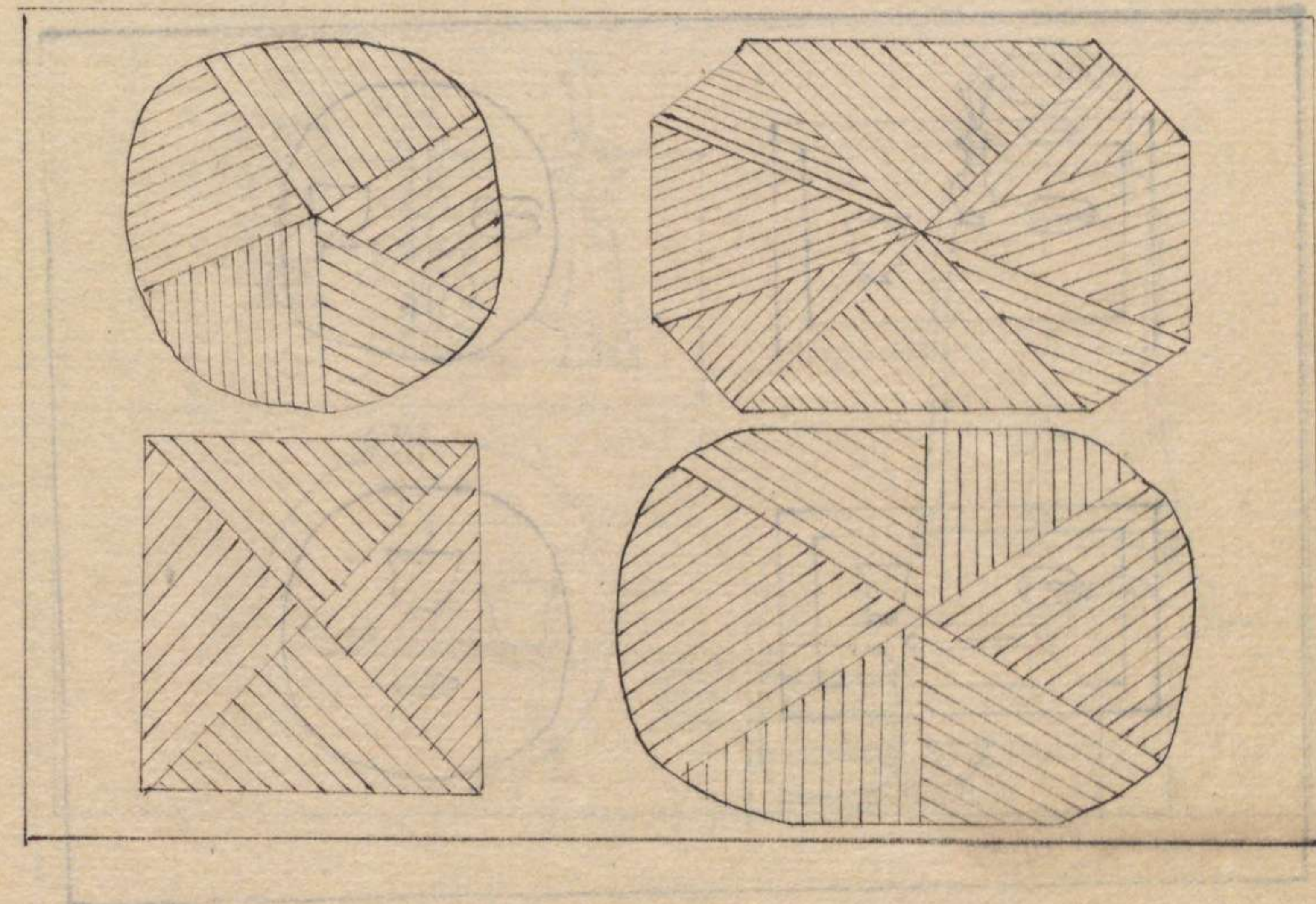












一 二具是ハ二幅ノ斜五幅一斜又ハ幅幅を然時並
 つきあり二ふく一斜又四幅ノ斜成然時ハ中ふ
 香櫛を並てりきふ花親成り候一
 一 風鈴ハ其の末より夏秋の初より廣縁の上或ハ
 書院の比きふけらる一又秋の末より冬
 の初より庭前の天井ふけらる一
 一 幅縁系枕成り候ふて一相より並とあり
 一 縁を二浅平ふけらる一
 一 書院の初より庭前の天井ふけらる一
 一 庭を並ふ一

一 枕 四角 八鏡 花靴 印金袋 市の横 唐力

一 歌 枕 楊子笥 麻姑 河梨動 此等の歌足

完て いく べき あり

一 綴 日は 題 唐苑 豹 虎皮 布とを して 記て 竹

倚 威ハ 曲 祿を 多く 蓄 銭 杖 あり 一 あり 團

扇 箒 杖 笠 薄 鶴 卓 此 亦 銭 多 食て け

後 多し

一 納戸 には 衣 多し 衣 亦 長 刀 あり 衣 多し 中 亦

衣 是 衣 多し 甲 衣 多し 一 のん まん け けて 口 一 尺

衣 多し 衣 多し 衣 多し

一 軸 衣 多し 中 端 と 中 端 と 衣 多し 一

一 看 衣 多し 衣 多し 衣 多し 衣 多し 衣 多し 衣 多し

衣 多し 衣 多し 衣 多し

右 一 卷 者 撰 考 於 家 秘 衣 之 聊 亦 衣 多し 衣 多し

衣 多し 衣 多し 衣 多し 衣 多し 衣 多し 衣 多し

衣 多し 衣 多し 衣 多し 衣 多し 衣 多し 衣 多し

衣 多し 衣 多し 衣 多し

天文十一年拾月朔日 池坊専應 在判